



会計や監査の “本質”を 探し続けてきた

日本公認会計士協会 主任研究員

関川 正 Tadashi SEKIKAWA

等松・青木監査法人(現、有限責任監査法人トーマツ)に入社後、米国アトランタ事務所での勤務、日本公認会計士協会への出向を経て、開発援助コンサルティング業務、公会計業務などに従事。国際公会計基準審議会ボードメンバー(2006年から2011年)、日本公認会計士協会常務理事(2010年から2013年)などを務める。2013年に有限責任監査法人トーマツを退職し、日本公認会計士協会主任研究員として、調査・研究業務に従事。



監査法人に勤務していた時代には、会計監査から開発援助のコンサル業務、公会計まで、幅広い業務に従事。国際基準の設定の舞台で活躍しながら、日本公認会計士協会の研究員や常務理事として、制度整備や実施支援に尽力されてきた関川主任研究員に、これまでのキャリアの中で貫いてきた、会計や監査の“本質”を探る旅についてお聞きしました。

28歳という若さで 国際基準設定の表舞台に

—会計士を目指したきっかけから教えてください。

子どものころ、税務職員だった父が仕事の話をしてくれる機会が結構あって、昔から漠然と税務・会計の分野に興味を抱いていました。とはいえ、大学進学時は、進路として明確に意識していたわけではありません。“法律よりは経済のほうが自分に合うのではないか”といった程度の感覚で慶応大学の経済学部に入學しました。

実は、大学受験自体、志望校に合格できずに、少し“不完全燃焼”な部分がありました。何か別の新しい目標が欲しいと思っていた時に、たまたま慶応大学の会計研究室でやっていた簿記の基礎講座を受講してみたんです。これがこのほか面白くて、公認会計士試験の受験を考えるよう

になり、大学2年の夏から専門学校に通い始めました。私立大学の高い学費は親に払ってもらっていましたが、専門学校の学費を払ってもらうわけにはいかないと考え、アルバイトをしてお金が貯まるごとにひとつの授業を取っていくようなペースで通っていました。

大学3年生で初受験した時に少し手ごたえはあったのですが、常識的に考えて、この程度の勉強量で受かるはずはないと思ったので、翌年の受験を目指して、合格発表までの2カ月間、かなり集中して勉強していました。実は最初の挑戦で運よく合格していたのですが、合格発表までの2カ月の勉強があったので、ようやく他の合格者と一緒のスタートラインに立つことができたのではないかと考えています。

—大学を卒業してから関川さんは、どのようなキャリアを積まれてきたのでしょうか。

大学4年の9月に等松・青木監査法人(現 有限責任監査法人トーマツ)に入社。そこから私のキャリアがスタートするわけですが、現在に至るまで大きく4つの時代に分けられます。まず第1期。入所から1998年までの13年間は監査業務が中心の時代です。でもこの頃から他の人とはちょっと違う経験をたくさんさせてもらいました。トーマツと提携していたトウシュ・ロスの米国アトランタ事務所でのトレーニーとして1年半働くチャンスをもたらしました。公認会計士になったばかりの24歳の時で

す。この頃トーマツでは、トウシュ・ロスの国際的なマニュアルを使って監査をしていたのですが、研修を受けても、先輩の仕事を見ても、正直、マニュアルの中身が良くわからなかった。その時思ったのは、“会計や監査というのはイギリスやアメリカで発達したものだから、そこに住んで生活してみないと、本質が掴めないのではないか”ということ。せっかく会計士になって、会計や監査の専門家になったのに、その本質を知らないまま、年を重ねていくのが嫌だったのです。アトランタでは、アメリカ人と一緒にアメリカ企業の監査をしていました。確かに同じマニュアルで監査をしているのだけど、日本とアメリカではかなり違うんですね。これまでやっていたことの背景が、ほんのちょっとだけわかったように思いました。

帰国して1年半後に、自ら手を挙げて日本公認会計士協会に出向。実はちょうど自分がやりたい仕事をやらせてもらえず悶々としていた時期でしたし、求められていたのが国際業務要員でしたから、これは良いチャンスだと思いました。

国際会計基準や国際監査基準に関する業務が中心だったのですが、当時は国際会計基準と言っても誰も知らない時代です。そんな中、国際監査基準を作っていた国際監査実務委員会(IAPC:現在の国際監査・保証基準審議会の前身)の日本代表の小林光司さんのテクニカル・アドバイザー(TA)をやられていた方が退任するこ

とになって、私が後任に指名され、国際会議の場に出席する機会を得ることとなりました。当時はまだ28歳、各国のTAにもそんな若い人はいません。自分のやったことが実際に国際基準の中身に影響を与えることに強いやりがいを覚えました。

協会への出向を通じて、小林さんや当時、協会の国際担当常務理事で国際会計士連盟(IFAC)の理事会の日本代表だった藤沼亜起さん、国際会計基準委員会(IASC)で日本人初の議長になられていた白鳥栄一さんなど、国際的に活躍する先輩会計士の方々と一緒に仕事をさせてもらい、そういった先人たちの活躍を目の当たりにして大きな影響を受けました。

キャリアの第2期は、政府開発援助(ODA)業務に注力していた時代です。元々、途上国支援に対する興味があり、1994年に協会での出向からトーマツに帰任した頃に、ちょうどODA部ができたので、チャンスがあれば仕事をさせて欲しいと言っていたのです。最初にやらせてもらったのは、旧ソ連のウズベキスタンとカザフスタンの国営鉄道会社の経営・財務分析を行う案件でした。最初は監査業務をやる一方でこのような海外調査業務をやっていたのですが、だんだん身体が持たなくなってきて、ODA業務専業にさせてもらいました。1998年のことで、会計ビッグバンが始まる直前です。日本の会計や監査が大きく変わり始める予感もして、監査業務に未練もありました。実は、協会に出向していた経験から会計基準や監査基準などの制度を作る仕事をしたいと思っていたのです。しかし、当時の日本では、企業会計審議会が基準設定を行っていて、私のように若い会計士がそういった仕事に従事できる可能性は低いと思いました。日本の制度作りに関われないなら、海外の制度作りに関わりたと思ったのです。実際には、その3年後に会計基準委員会(ASBJ)ができたので、「早まった」と思いました。(笑)

とはいえ、日本のODAの中で会計や監査に関係する仕事がたくさんあるわけではなく、援助の評価業務だとか国営企業



の経営分析など、自分にできそうなことは何でもやりました。ようやく、2003年から2年間、タイ国の会計向上のためのプロジェクトにチーム・リーダーとして関わることができ、この時にはじめて、自分がやりたかった会計制度の整備を支援する業務に本格的に従事することになりました。

“本質”に迫る方法は3つある

—国際公会計基準審議会(IPSASB)のボードメンバーとしても活躍されましたよね。

きっかけになったのは、日本公認会計士協会の公会計委員会の中でPFI(プライベート・ファンド・イニシアチブ)の会計処理に関する研究報告を作成することになり、委員として声がかかったことです。当時、日本の会計士でPFIに知見のある人はあまりいなかったもので、まあ、関川なら海外でいろいろやっているもので多少知っているだろうという程度のことでした。副専門部会長として、研究報告を取りまとめたのですが、その後、英語ができるんならとい

うことで、IPSASBを検討する専門部会の委員もやることになりました。そうしているうちに、IPSASBへTAとして参加しないかという話が持ち上がったのです。条件的には国際財務報告基準(IFRS)を知っていて、英語ができて、そして公会計のことを理解しているという3点がありました。当時の日本は公会計の黎明期で、IFRSの任意適用も始まっていない頃ですので、この条件を全て満たせる人はほとんどいなかったと思います。私は公会計には業務としては関与していませんでしたが、協会の委員として関与していましたし、IFRSには多少ブランクはあるけど、何とかやっていけるだろうと、大役を引き受けることにしました。そこから私のキャリアの第3期、公会計時代が始まります。

IPSASBではちょうど、私が得意とする開発援助の会計がテーマとなるタイミングだったので、熱心に議論に参加して、コアなメンバーの一員として認知されるようになり、2006年から6年間、ボードメンバーを務めました。ボードメンバーになって最初の会議が東京だったのですが、会議に合わせて開催されるセミナーを東アジア10カ国で同時中継しようと計画。世界銀行のネットワーク設備を使い、協会の

予算も沢山使わせていただき、中継が実現しました。IPSASBにボードメンバーとしていかに貢献するかを考えた時に、自分のキャリアを考えて、アジアの代表としての意識を強く持つようにしていました。欧米の方と異なりアジアの人は意見をあまり強く言わない傾向があります。表だって意見を言わなくても、国際基準には強い関心を抱いていることは、自分がODAでいろいろな国に行っていた時に感じていましたので、そこに情報を届けて、利害関係者の声をもっと聴くべきだろうと、そんな風に考えていました。

実は、この頃から監査法人のビジネスとしてODA業務を継続することが難しくなってきたので、部門を閉めて、自分自身は公会計の担当として、ほぼ10年ぶりに監査業務に復帰することになりました。また、2007年から3年間は公会計委員会の副委員長、2010年から3年間は公会計担当の常務理事を務めましたので、PFIのころから数えると10年以上、協会の公会計に関与していたことになりました。

そして、今、4段階目のキャリアとして、日本公認会計士協会のJICPAリサーチラボの主任研究員として調査・研究の分野に従事しているところです。

—非常に幅広い経験をされていますね。

こうして自分のキャリアをお話すると、行き当たりばったり、全然違うことをやっているように見えるかも知れませんが、自分の中では割と一貫していることがあって、これまでずっと、“どうしてこうなっているのか？”と、物事の本質を追求したいと考えてやってきました。例えば、若い時に海外に行きたいと思ったのも、日本にただけでは会計や監査の本質はわからないと思ったからです。

さらに国際会議に参加するようになると、各国それぞれに考え方が違うのがわかってきます。欧米と一言で言いますが、欧州と米国では考え方は違うし、英国と大陸でもかなり違います。各国の色々な考え方や制度を知ると、今まで当たり前だと思っていたことがそうでないと分かってきます。例えば、アメリカと日本のことだけを知っているだけでは、“日本は遅れている”“アメリカは進んでいる”と捉えがちですが、そこに“欧州はどうか？”“アジアはどうか？”という視点を加えて相対化していくと、だんだん自分の思考が整理されてくる。その感覚が非常に面白かったんですね。

公会計もそうです。企業の会計だけやっているときに当たり前だと思っていたこと

が、当たり前でないことがたくさんあります。それが見えてくると、今までの自分の考え方が狭かったと思えてきて、思考に広がり生まれます。

実は“本質”に迫る方法は3つあると思っています。それは「空間を飛び越える」か、「対象を飛び越える」か、「時間を飛び越える」かのいずれかです。空間を飛び越えるというのは、先にお話したように、違う国の事情を知ることで見えてくるものがあるということ、対象を飛び越えるというのは、まさに公会計をやってみると、企業会計を含めた会計の本質が見えてくるという視点ですね。そして3点目の時間を飛び越えるというのは、歴史を知ると見えてくることだと思うのです。今まで、なかなか会計や監査の歴史を学ぶ機会もなかったもので、これからの私の中のテーマです。JICPAリサーチラボの業務の中で歴史を記録することにも重点を置いているので、興味を持って取り組んでいます。

バッターボックスに 立ってみなければわからない

—現在は、JICPAリサーチラボのリーダーとして研究員を取りまとめながら業務を進めていらっしゃいますが、どのようなやりがいを感じていますか。

今は、仕事で調査や研究をさせていただいているので、今まで「なぜだろう」と疑問に感じながら通り過ぎていたことに、仕事として一歩踏み込んでいく時間とリソースがもらえるのがありがたいですね。例えば、女性の会計士の比率はどうして国によって違いがあるのか。日本は少ないのですが、欧米だから同じ傾向があるわけではなく、ドイツは日本と同じくらいに少ないし、英国とアメリカでも違う。アジアに至ってはさらに異質で、タイでは会計士の9割くらいが女性なんです。以前からすごく興味深く思っていて、どこかの国に行くたびに「あなたの国はどうか？」と聞いてきました。どうしてなのか？理由をその国の人に聞



いてもわかりませんよね。だって、自分の国しか知らない人にとっては、それが当たり前のことなのですから。

会計士の多い国、少ない国の違いは何か、監査市場の寡占が進んでいる国とそうでない国では何が違うのか。興味のあること、知りたいことは限りなくあります。今まで常識とされてきたことや、何となく通り過ぎてきたことに焦点を当てて、「ちょっと待てよ」「それって本当？」と突っ込んでいけることが面白くて、楽しく仕事をさせてもらっています。

一関川さんご自身の今後の目標は？

JICPAリサーチラボの活動を軌道に乗せることが目下の課題ですが、将来的には、再び国際基準の設定などの舞台で仕事をしたい気持ちもあります。ただ、今は、家族の病気の問題があって、海外へ行くことが難しいので、具体的な目標を持ちづらい状況です。話は少し変わりますが、ホームランを打とうと思ったら、バットを振らなくては仕方がないし、バットを振るためにはバッターボックスに立たなくてはなりません。私自身、この先、またバッターボックスに立つチャンスはあると思っているので、素振りだけはしておきたいですね。

一最後になりますが、若手の会計士にメッセージをお願いできますでしょうか。

私の経験からして、まずは“海外に行ってみる”というのがすごく重要だと思いますし、できれば、日本を含め、文化の違う3カ国以上を経験するのが理想だと思います。結局、2カ国だけだと、経験したその外国が世界だと思ってしまう。特に会計士の世界はアメリカの影響が強いので、アメリカを世界と勘違いするリスクは大きいと思います。先輩方の中でもグローバルな視点を持っている人は、アメリカ以外の外国での経験がある方が多いように思います。

さきほど、バッターボックスに立つ話をしましたが、日本人はそういった部分で謙虚というか引っ込み思案な人が多いですよ。でもバッターボックスに立って、その



スピードボールをこの目で見ないと、自分がどのレベルにいるかもわかりませんよね。チャンスがあったら、躊躇せずバッターボックスに立って、思い切りバットを振って欲しいです。

どんな人が国際的に活躍できるかというと、やはり向いているのは好奇心旺盛な方でしょう。海外出張する際には、会議室やホテルにこもっているだけでなく、忙しいとは思いますが、できるだけ外に出て、街の様子を見てみたり、現地の人と触れあったりして欲しいですね。言語についても、その国の言葉が多少でも使えると、一気に仲良くなれます。少なくとも言葉や文化に興味を持つことは大切ですね。そんな経験が、自分の心や感性を豊かなものにしてくれることは間違いありません。好奇心は探求心につながりますし、新たな発見の中から、また本質へとアプローチできる道筋が見えてくるかもしれません。

このインタビューは2018年4月3日に実施されました。



〒102-8264 東京都千代田区九段南4-4-1
TEL:03-3515-1120(代表)
03-3515-1130(国際グループ)
<http://www.hp.jicpa.or.jp/>